# 脱皮的彫刻

市民参加のかたち：ワークショップ・展示鑑賞

「脱皮的彫刻」は、石膏を人体に直接塗り、そこから抜け出る過程を身体的に体験するパフォーマンスである。これまでBankArt、多摩美BlueCube、バンクーバー美術館などで公演してきた。繊維を混ぜ込んだ石膏を体の後ろ半分に塗ることで、体の型を「抜け殻」のように残すことができる。千葉国際芸術祭では、この作品をパフォーマンスとしてではなく、ワークショップ形式で行い、人々の抜け殻を展示する。
市民から参加者を募り、参加者に対する聞き取りを行ったのち、ポーズを決め、石膏取りを行う。参加者の言葉（または映像）と共に展示する。

Photo：長田朋子

## 高嶺 格

1968年、鹿児島生まれ、東京在住。京都市立芸術大学漆工専攻卒。岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー修了。主な個展に、「とおくてよくみえない」（横浜美術館／広島市現代美術館／霧島アートの森を巡回、2011）、「大きな休息ー明日のためのガーデニング1095㎡」（せんだいメディアテーク、2008）、「スーパーキャパシターズ」（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2010）、「高嶺格のクールジャパン」（水戸芸術館、2012）など。またヴェネツイア・ビエンナーレ（2003）への参加をはじめ、釜山ビエンナーレ（2004）、横浜トリエンナーレ（2005）、あいちトリエンナーレ（2015, 2019）など、数々の国際展をはじめ国内外のグループ展に多数出品。90年代にパフォーマーとしてダムタイプで活動したほか、ダンス作品における舞台美術や音楽家とのコラボレーションなど、他ジャンルとの共同制作も数多い。多摩美術大学彫刻学科教授。